

# 平和文化構築のパラダイム

— 日本文化からの一提言 —

---

奥村和滋

## 1 積極的平和主義と構造的暴力

2015年9月に国会では安全保障関連法案が強行採決で成立したが、その法制成立の推進力となったのは、安倍政権が掲げる「積極的平和主義」という言葉であった。

これはノルウェーのガルトゥングという平和学者が提唱した概念であり、安倍総理は全く曲解した意味で使用している。

ガルトゥングによれば、戦争という直接的な暴力がないという消極的平和と区別して、平和を脅かす構造的な暴力のない状態こそが積極的平和である。一方安倍総理のいう積極的平和とは、アメリカと一緒にあって軍事活動することだから、全く真逆の使い方をしていることになる。ガルトゥング本人は自分の概念が平然と誤用されていることに気づいて、八月に来日して抗議の声を上げている。<sup>(1)</sup>

彼のいう構造的暴力は、「政治的なもの（抑圧）」「経済的なもの（搾取）」「文化的なもの（疎外）」という三つの形態をもっている。近年の身近な例を挙げると、大半の国民が反対し憲法学者がこぞって憲法違反だと主張しているにもかかわらず、強行採決で平然と安保法制が作られる今の政治のありかたは、政治的な構造的暴力の典型的な一例である。また、米国をはじめとした国民の経済格差が激しい国ではすでに為されていることだが、経済的に貧しい若者たちに対して、奨学金の援助や生活援助の便宜をはかることを釣り餌にして徴兵するという経済的徴兵制は、経済的な構造的暴力だといえるだろう。さらに、反知性主義の今日では、文化的な構造的暴力が生み出されやすい状況になってきている。

---

(1) カトリック新聞 2015年8月15日

先日某県知事が公の場において、「女子高生にサイン・コサインを教えることは必要のないことだ。むしろ花の名前を教えておけばいい」といった発言をしたと報道されたが、学習に男女の差別を持ち出すところに、ひとつの文化的な構造的暴力がある。

こういう文化的な構造的暴力が、人々の文化の質を低下させるばかりではなく、世界の平和を蝕んでいることに注目しなければならない。ものを考えない人間は、特別に激しい動機もなく、結果的に大きな悪を為してしまうことがある。かつてハンナ・アーレントは、ナチスのアイヒマンを例に「凡庸な悪」について語っている。<sup>(2)</sup>

国の文化の質の低下は、その国の平和と安全を損なうのである。逆に言えば、その国の文化がほかの国々から尊敬され高く評価されていることが、その国の安全を守る大きな力になるのである。日本に原爆投下をするか否かをめぐってアメリカでのいきさつを例にあげよう。<sup>(3)</sup>

1945年7月にアメリカは原爆実験に成功。当時の日本は戦闘能力をほとんどなくしていたので、原爆投下にはほとんどの科学者や軍人は反対していた。マッカーサーも、原爆の使用を「軍事的には全く不必要」と考えていた。それは「日本は降伏の用意ができていて、あんな恐ろしい兵器を使用する必要はない」「自分の国があんな兵器を用いる最初の国になるのを見たくない」といった理由からだ。ところがその一方で、日本人はゴキブリ、ガラガラヘビ、ネズミなんだというイメージが広がり、ついには抹殺してしまえ、という心理に傾いていったのだといわれる。その点、ドイツに対しては、ナチスのホロコーストにもかかわらず、ナチス指導者と「善良なドイツ人」とが慎重に区別されていたのである。

日本への尊敬や敬意があれば、原爆は落とされずにすんだのかもしれない。日本の文化への理解と尊敬が平和にとって極めて大事であり、文化への敬意なしには平和はないといえるだろう。日本を守るのは、強い軍事力ではなく、日本の文化のレベルの高さが世界の人々に十分に理解されていることなのである。

日本には世界に誇れるユニークで上質な平和の文化が存在しているの

---

(2) ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン—悪の陳腐さについての報告』みすず書房 1969

(3) 大井玄『呆けたカントに「理性」はあるか』新潮新書 2015

ではないか。それを「ノーモアの文化」と名付け、その特質を「脱比較思考」「和解」「うらみの解毒」という三つの観点から考察したい。人の心に根深く潜んでいる文化的な構造暴力に対して、日本のその平和文化がそれらにどのように対抗し克服していけるか、その可能性を探っていききたい。

## 2 平和を蝕む文化的な構造暴力

### (1) 競争の原理、あるいは愛の選別

競争は「必要悪」だといわれる。その必要性ゆえに競争を肯定的に捉える声が多いが、必要といえどもそこに悪が潜んでいることを忘れてはならない。

競争のためには、何でもデジタル化して比較する必要がある。その結果あらゆる価値は価格のついた「商品価値」になってしまう。生命の価値にも値札が付けられるのである。

教育には子どもの商品価値を高めるという役割が与えられ、そのためには競争心を掻き立てることが一番効果的だという考え方が蔓延する。しかし競争心はもともと人間の欲望がもとになっているので、そういう教育の営みには人間の狡さや汚さがつきものであることは免れない。

競争の目的はつまるところ一体何なのだろうか。競争を肯定する人々は皆が切磋琢磨して上達する効果に目を奪われがちだが、競争の最終的な目的は「選別」と「切り捨て」を目指しているのである。かつて文化長官を務めていた時に三浦朱門氏は、今後の日本の教育のビジョンを述べるにあたって、(国を引っ張っていくうえで)「百人に一人のエリートでいい。限りなくできない非才・凡才には心の教育を与えておけばいい」と語っている。<sup>(4)</sup>

競争で勝ち抜いて生き残ろうという考え方が蔓延していくと、世界は上下を争う「比較地獄」になってしまうだろう。

愛を得るための条件にも、競争主義は無自覚のまま利用されている。家庭や学校で、子どもたちは親や先生の評価を得るために、愛してもらうために、人と競争して差異価値で自己肯定を得ようとしている。恋愛の対象も比較して選ばれることになる。愛もまた選別と切り捨ての対象

(4) 斎藤貴男『機会不平等』文藝春秋 2000

なのである。こういう価値の比較を当然のことだとして疑うことのない我々の心の習性こそが、愛の選びの問題を隠ぺいしているのである。

## (2) 正義の修羅場

人間の争いごとは、善 vs 悪ではなく、つねに善 vs 善の構図に基づいている。

興福寺の阿修羅像で有名な阿修羅は、古代インド神のアスラが仏教に取り入れられたものである。アスラは正義の神であり、そのライバルはインドラ（仏教に入って帝釈天）という力の神だった。アスラはある日愛娘をインドラに略奪結婚されて、そんな不正は許せないという激しい義憤に駆られ、ついには正義ゆえの戦いに明け暮れる。しかし力の神であるインドラにはどうしても勝つことができない。ついに世界は戦場となって荒れ果て修羅場と化してしまう。「正義の私がなぜ勝てないんだ」という悔しさが、阿修羅像の三つある顔のうち下唇を噛みしめる横顔の相貌をかたどっている。

勝つためには力が欲しい。だから正義は力を求めていくことになる。かくして阿修羅はついに悪鬼となって、地獄へ落とされる運命になってしまう。

正義にこだわり過ぎると力に訴えてしまい、ひいては力こそが正義になってしまう。力が正義だという考え方が知らないうちに私たちの常識になっているのではないだろうか。「勝てば官軍、負ければ賊軍」という諺には、戦争を正当化してしまう文化的な構造暴力が込められている。

## (3) 不条理の嘆きとくらみ

「なぜ善人が苦しい目に合うのだ？」

このヨブ（旧約聖書のヨブ記）の嘆きは全人類の苦しみである。罪もない幼い子供がなぜこんなひどい目に合うのか、この世の不条理への嘆きとくらみが、人々の心の平和を蝕み、世界への不信感を増大させている。

理想的な世界を作るために、ラスコーリニコフ（ドストエフスキー『罪と罰』）が高利貸しの老婆を斧で殺害したのも、夜神月がデスノートで

犯罪者を抹殺するのも、不条理な現実への虚しい抗いであった。

この世の不条理と理不尽への嘆きは、そのまま世界への不信やニヒリズムにつながり、世界の変革をめざして暴力・テロに走るのである。

「愛はなぜ終わるのか？」

あれほど純粹にはげしく愛していたのに、永遠を誓っていたのに、どうして愛は儚いのか？ 愛における永遠と儚さとの落差は、人をこの世への嘆きと否定に誘っている。

信じていた愛の変節と身悶えするほどの嫉妬が人を鬼と化することを、古典の文芸が巧みに表現している。源氏物語の六条御息所の生霊や、道成寺の清姫の悲話、安達が原に住む鬼婆、鉄輪の丑の刻参りなどは、鬼のうらみの心という構造暴力の表現である。

### 3 リベンジからノーモアへー日本文化の再発見ー

前述した文化的な構造暴力に対抗する日本の平和の知恵を提案したい。

#### (1) 脱比較思考

上か下かの比較地獄から解放されると、争い事は減るだろう。

勝ち負けの比較は、上か下かを測るモノサシを使うが、このモノサシは人の心に根深く染み込んでいる。鏡映反転で左右は反転しても上下は反転しないという事実は、上下の不変性の意識に大きな影響力を与えている。また、「重力」による上下座標が、人の価値観を形成している。重力に抗して上へ上へ上るほど立派だという価値観である。その意味では、無重力の空間で暮らしているならば、この価値観は変化するかもしれない。

日本の文化は、上下よりも「内・外」の区別が大切にされていたことを思い出してみたい。

#### ① 「内・外」の区別と調和・日本文化の空間意識

##### a 「オク」の重視<sup>(5)</sup>

奥ノ院、奥義、大奥、奥様、といった語には、奥にはカミがいる、

(5) 加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店 2007

立派で深いという意味が込められている。オクの重視は、「内」の空間を大事にする日本人の空間意識である。

b 水平志向<sup>(5)</sup>

日本の建築は高さを競うものではない。神社に高い塔がないことは、高さを誇る西欧の大聖堂との違いである。(法隆寺の五重塔は高さではなく、廂や屋根の水平への伸びやかさを強調している。)

日本舞踊や能舞台では、役者はすり足で足を運び、高く飛び上がることは通常しない。

c 建増しの美学<sup>(5)</sup>

日本の家屋には建増しの建造物が多い。当初の計画になかった事情で建て増すので、見た目では不細工な形になるが、家族が増えるなどの内の事情が重視される日本人の美学がそこにあるだろう。

d 日本語の「こ・そ・あ・ど」体系

それは事物・方角・場所・人称を表現する言語で、ものごとや人間関係が、内か外かで色分けされる。

事物	方角	場所	人称	
こ・・・これ	こっち	ここ	こなた	(近称)
そ・・・それ	そっち	そこ	そなた	(中称)
あ・・・あれ	あっち	あそこ	あなた	(遠称)

内も外も人の生活空間だから、互いに排斥し合うのではなくて、両者のつり合いや均衡を保ちながら暮らすことが求められている。内と外との区別があるからこそ、全体の調和の大切さが自覚されてくるのである。

内外の色分けがなければ、すべての色彩が混じり合って灰色空間が登場してくる。私たちに身近な灰色空間に「道路」の空間がある。車に乗って道路を走るとき、急ぐわけでもないのに思わずアクセルを踏みこんでしまうのはなぜなのか。はやくはやくと急ぎ立てる力がそこに働いているのであろう。より速いことがいいことだ、という上下の競争の座標軸が道路空間を貫いているのかもしれない。

## ②選ばない愛の運命

「愛の対象は比較の上で選ぶものではない」という発想が日本人の中にあつたことを「うない乙女」「浮舟」「かぐや姫」を例に指摘したい。

うない乙女（万葉集）・・・神戸の芦屋が舞台。村にうない乙女という美しい娘がいた。彼女に二人の男が求婚し、互いに激しく争うようになる。自分のために立派な男たちが争うことに心痛めた彼女は生田川に身を投げた。その夜、二人の男も後を追って命を絶ったという伝説である。この話を基にしたものに、世阿弥の謡曲『求塚』や森鷗外の戯曲『生田川』、川本喜八郎の人形映画『火宅』がある。

浮舟（源氏物語宇治十帖）・・・浮舟は薫大将と匂宮の二人から愛され、悩んで入水自殺をはかるが、横川の僧都に助けられ、出家して俗世の愛を拒んだ。

かぐや姫（竹取物語）・・・光り輝く竹の中から竹取の翁に見出され育てられたかぐや姫は、五人の貴公子から求婚されるが、結婚の条件としてとても入手困難な代物（仏の御石の鉢、蓬莱の玉の枝、火鼠の皮衣、龍の首の珠、燕の産んだ小安貝）を要求する。このことは、自分が一人を選ぶことで五人の公達が互いに争い傷つくことを避けるために、自らが身を引くことを選んだのだと解することもできるだろう。

これらの女性たちの振る舞いは、対象の価値を比較して選択するという愛の選びを命がけで拒んでいるのではないだろうか。ただ、かぐや姫は帝とは和歌の遣り取りを続けており、月に帰る直前に帝に手紙と不死の薬を贈っている。帝は姫と会えず涙にくれる自分にとって不死の薬が何になろうと日本一高い山でその薬を焼くように命じた。愛は選ぶものではなく愛は育むものであることが伝わってくる物語である。

## (2) 裁きから和解へ

正しさへの強いこだわりが争いを深めてしまうことがある。日本の文化はそのことにどのような対応を示してくれるのだろうか。

① 調停の文化

争いごとに対して、どちらが正しいかを明らかにする裁き（仲裁）ではなく、当事者の合意と和解を目指すという調停の文化が日本に伝わっている。それは、正しさの勝ち負けにこだわらずに、丸く収める、落としどころを見つけるという解決である。

落語の三方一両損の話は有名である。：左官屋の金太郎が三両入った財布を拾って落とし主の大工の熊五郎へ届けるが、一旦落としたものは自分のものではないと受け取らない。二人はついに大喧嘩になったので、ついに大岡越前守に訴えて白州の上で判定してもらう運びとなった。大岡越前が自分の懐から一両出して、二人に二両与えた。金太郎はそのまま貰っておけば三両貰えたものを二両しか貰えず、熊五郎もそのまま受け取れば三両あったのに結局二両しか貰えない。越前も身銭を切って一両出したので、三方が皆それぞれ一両ずつ損することで、折り合いをつけて丸くまとまることができた。

②和解に見る引き際の美学

1 「和解」

小泉八雲に「和解」という作品がある。<sup>(6)</sup>

昔京の都に若い侍の夫婦が貧しい暮らしをしていた。士官の道が開かれたのを機に、夫は妻を捨てて遠国に士官する。男はそこでかなりの家柄の娘と結ばれるが、そこでの生活は幸せとはいえず、事あるたびに元の妻を懐かしく想い出し、後悔と自責の念に苛まれていた。任期が終わり、男は第二の妻と離縁して、京の昔の家に急いだ。そこには前の妻が変わらぬ姿で待っていてくれたのである。男は彼女を強く抱きしめ、何度も何度も赦しを乞うた。女は彼の謝罪をやさしく拒み、二人は空が白むまで、これまでのこと、これからのことを語り合った。

次の朝、男が目を覚まして横の彼女を見て悲鳴をあげた。白い骨ともつれた長い黒髪しか残っていない屍が横たわっていたのである。男は身を震わせ、耐え難い絶望と苦痛に囚われる。女は捨てられた年の秋、離縁された悲しみのあまり病で亡くなっていたのである。

(6) 小泉八雲「和解」（『影』に収録）『小泉八雲集』新潮文庫 1975

八雲はなぜこの作品に「和解」という題名を付けたのだろうか。前妻が幽霊になって男のまえに美しく優しい姿で甦ってきたのは、裏切った不実な夫への復讐のためではあるまい。霊になってでも夫と再会したいという一心だったのではないだろうか。恨み言ひとつ言わずに。彼女のその真心に気づいた男はどんな気持ちだっただろうか。呆然としながらも、自分の罪の痛みを感じながら、妻の真心に激しく涙を流す。

和解は、先ずは一方が身を引くことから始まる。それを受けて、相手に深い反省と謝罪の思いが湧き上がれば、そのとき和解が成り立つのである。争いごとの只中で自分から身を引くということは簡単なことではない。争いを続けるよりも大事なことがあるという理性的な気付きがあるから、自ら身を引くのである。その引き際の美学に八雲は深く心を打たれたのだろう。<sup>(7)</sup>

## 2 オオクニヌシの国譲り

和解のルーツは日本神話にあるのかもしれない。出雲の支配者であるオオクニヌシが、その支配権を高天原のアマテラスに譲るという古事記の物語である。アマテラスは出雲の地をわが子に統治させるために、オオクニヌシからその地を奪おうと何度か使者（刺客）を送り出すが果たせず、ついにタケミカズチを送り力づくで奪おうとする。オオクニヌシは争わずして降参して、国土を譲って隠退する。その後出雲の地に巨大な神殿が建てられた。今の出雲大社である。

オオクニヌシとアマテラスが争うことは、天上界と地上界との大戦乱であり、出雲の国と住民に大きな犠牲を強いることになるだろう。オオクニヌシが身を引くことで、争いが回避されたのである。

古事記に記述されていないが、オオクニヌシが身を引いたことで、マテラス側に心の揺らぎが起きたのではないだろうか。人望の高いオオクニヌシから土地を奪い彼を黄泉の国に追いやったことには、流石のアマテラスも心痛めたのだろう。それが空中神殿として立派な神殿を建設することにつながったのかと推察される。また、天と地との和解によって出雲の人々は救われたわけで、オオクニヌシへの人々の感謝と崇敬の念はさらにいっそう高まったことだろう。

(7) 手塚治虫の「安達が原」という作品には、これに共通するテーマが描かれている。『手塚治虫 恐怖短編集7「千年の孤独編」に収録「安達が原」』講談社漫画文庫、2003年

その他、浜田廣介の「泣いた赤鬼」や、木下順二の「夕鶴」、ひいては八雲の「雪女」などにも和解の知恵が描かれていると思われる。

### (3) うらみの解毒

この世の不条理への嘆きと怨念が争いごとに拍車をかける。日本の文化には、かかるうらみを解毒して平和に供する知恵が込められている。

#### ① 悲しむ心

御霊信仰にみる鎮魂のメカニズムは日本独自のものである。非業の最期を遂げて復讐を迫る怨霊に対して、それを退治するのではなく、神として祀るという文化である。

怨霊に対峙してその非業の死を悼み、深く悲しみ、共感することによって、怨霊は守護神へと変容する。リベンジの棘が抜けて、ノーモアの思いが高まってくるのである。

古くは藤原広嗣、早良親王などの例があるが、菅原道真の雷神としての怨霊は広く伝えられている。道真は幼少から文武両道に優れ宇多天皇に気に入られて一気に要職に就くが、醍醐天皇に代わるや、藤原時平らの策略にかかって大宰府に左遷され、不遇のまま生涯を閉じる。そのとたん道真の怨霊が雷や呪いを駆使して自分を陥れた時平はじめ周囲の者をことごとく抹殺していった。後に道真の怨みの鎮魂のために、北野天満宮が建てられ彼を神として祀れば、怨霊は御霊となって人々の守護神となり受験生の神様として親しまれることになる。

怨霊が御霊となることの転換点は、冤罪で滅ぼされた者に対する人々の悲しむ心である。悲しむという理解を受けて、復讐のうらみは解毒されて平和への祈願へと変容する。オオクニヌシの場合、国を奪われるという不遇に遭いながらも、身を引いた彼を人々が悲しみ、出雲大社の空中神殿に祀って崇敬したことで、彼は怨霊にならずに済んだのだろう。壇ノ浦で滅んだ平家の怨念は、琵琶法師がその悲劇を語りついでお陰で鎮魂されたのかもしれない。

#### ② 日本人の微笑

ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、日本人の不可解な微笑に魅了

された。明らかに場違いな時の微笑として、彼は次の例を挙げている。

横浜に住むイギリス婦人から聞いた話だとして、日本人の女中さんの奇妙な話を取り上げる。「うちの日本人の女中があるとき私のところにやってきて、とても嬉しいことがあったみたいに微笑しながら、実は私の亭主が亡くなりましたので、お葬式に出たいのでお休みを取りたいと言ってきた。・・・夜に帰ってきて、骨壺を見せて言った。『これがうちの主人ですよ』と言うなり笑い声を立てるじゃありませんか。こんなひどい人間がいるなんて、あなた、しんじられます?」<sup>(8)</sup>

「世間に対して、いつも元気そうな態度を見せることが生活の規範」だという日本人の礼儀正しさの感覚に、ハーンはそのわけを見出している。不幸そうに見えることは無礼なことであり、目上の人や客人の前でこらえきれずに泣き出してしまうことは不作法だという日本人の感性。その自己抑制と克己の精神によって、愛する人を亡くしたばかりの人が、笑い声を立てることができたという。

ハーンの日本人の微笑への関心は、芥川龍之介の「手布（ハンカチ）」という作品<sup>(9)</sup>にも受け継がれている。

主人公の長谷川勤造（新渡戸稲造がモデル）教授が読書しているところに女性客が訪れる。教授が親しくしていた西山憲一郎という学生の母親の西山篤子という女性だった。実は息子が腹膜炎を患って亡くなったという報告に来られたのである。母親は大変な不幸の最中にあるにもかかわらず、何事もなかったかのごとくにこやかに平静に対話している。

「先生は意外な事実気がついた。それは、この夫人の態度なり、挙措なりが、少しも自分の息子の死を、語っているらしくないということである。眼には、涙もたまっていない。声も平生の通りである。その上、口角には微笑さえ浮かんでいる。・・・先生には、これが不思議であった。」

何かの拍子で、教授が手にしていた団扇がテーブルの下に落ち、それを拾おうとしたとき、婦人の手が激しく震えているのに気づいた。しかも膝の上のハンカチを、両手で引き裂かんとばかりに強く握っているの

(8) ラフカディオ・ハーン『新編 日本の面影』角川ソフィア文庫2000

(9) 芥川龍之介「手布」『芥川龍之介全集1』ちくま文庫 1986

に気がついた。

「婦人は、顔でこそ笑っていたが、実はさっきから、全身で泣いていたのである。」「婦人は心もち頭を下げた。晴々とした顔には、依然として、ゆたかな微笑が、たたえている。」

相手にとって一番気持ちの良い顔は微笑んでいる顔であるとハーンはいう。日本人の微笑が周囲を和ませ、穏やかな平和の雰囲気を作ってあげている。そして、その抑制と克己の微笑を支えるものを、芥川は「手」において表現している。手がうらみの嘆きを微笑みに変えてくれたのである。

思うに、その手は、本当はハンカチを握ることではなくて、共に生きる他者の手と結ばれることを求めているのではないだろうか。掌（手のひら）と書いて「たなごころ」と読むことから、手には心がこもっているのだろう。掌は掌を求めているのである。

### ③掌の文化

手と手をつなぐ、掌同士をつなぐことができるのは人間だけだという。ゴリラやチンパンジーの霊長類は、物や仲間に触れるときは、手の「甲」で触れるので、手のひらでつながることはできない。心ある掌のつながりにはこの世の不条理に耐える力が潜んでいる。

遠藤周作の文学の中には、掌の大きな働きが描かれている。遠藤はいろんな作品の中で、死に近い患者に付き添う看護師が患者と「手を握る」場面を描いている。「あたしたちは手術中に声を上げて苦しんでいる患者にどうすることもできない時なぞただ手だけを握ってあげるんです。そんな時大きな男の患者さんまでもが静かになることがあるんです。」

また、病室で互いに手を握る一組の夫婦が描かれている。若い妻は白血病で死期が迫る夫の手を握りしめている。それは自分ができる精一杯の行為。遠藤は、夫の苦痛をともに背負う若妻の姿に、「あの人」を意識している。あの人とは、イエスの姿。あの方は人々のそばにいつもいて、手を握ってくれているのである。

『死海のほとり』<sup>(10)</sup> で、アルパヨという男はひとり熱病に苦しんでい

(10) 遠藤周作『死海のほとり』新潮社 1973

た。そして自分を見捨てた者への憎しみの中で死をまっていたとき、あ  
の人が小屋にやってきた。

『そばにいる。あなたは一人ではない』 あの人が手を握ってくれる  
と、苦しみがふしぎに少しずつ減っていくような気がした。」手を握り  
一人ではないことを示す姿は、まさに「愛」の行為といえる。

ただし手を握ることによっては、人を死からは救い出すことはできな  
い。その哀しみをも、手を握る人は背負うことになるのだろう。しかし、  
遠藤文学は、死で潰えることのない、もっと尊いものがそこにあること  
を描いているように思う。握られた掌のぬくもりの中に、ぐいといのち  
につながる希望が芽生えている。この世の不条理とニヒリズムに押しつ  
ぶされずに、笑顔を生み出す力が掌に潜んでいる。

上か下かの競いではなく、内と外のつり合いを求めること。そして、  
裁きではなく、和解する知恵と勇気。掌の温かさと哀しみ。そこに生ま  
れる微笑みと愛。そこに、日本の平和の文化が息づいている。

リベンジからノーモアへ。いまやその精神を粘り強く世界に伝えてい  
くこと、そして本来の意味での積極的な平和を地球上に広めていくこと  
の意義は大きい。

\*本稿は「純心市民講座『現代を生きる知恵』（2015年9月19日）」での  
講演内容に加筆修正したものである。

（鹿児島純心女子短期大学教授）